

ねいの里 ホオホオニュース



トンボの遊園地



水辺が草花で彩られるようになる季節、ねいの里は多様なトンボを観察できる格好の場所となっています。

1円玉サイズの小さなトンボ、「ハッチョウトンボ(県希少種)」が飛び交う水辺がねいの里にあります。毎年6月～8月頃観察できます。このトンボは、県内では一部の休耕田など草丈の低い日当たりのよい湿地に生息しますが、時が経つと草丈がのびてしまうので安定した生息環境がないのが現状です。

日本最小といわれる大きさから、草丈の高い植物に止まると他のトンボに狙われます。「ハッチョウトンボの遊園地」では日当たりや水量を管理しながら、アシを除去しイグサなどの草丈の低い湿地植物が生える環境を整えています。これらの植物は遊園地の遊具というより、天敵から身を守る役目もしています。

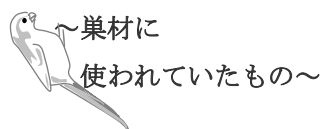
まさに「愛の巣」



人間の赤ん坊は、ふわふわの布団で眠っていますが、動物の世界ではどうでしょうか。

昨年春、ねいの里の散策路に丸い袋状の巣が落ちていました。全体はコケなどの主材としていて、楕円形の袋に小さな出入り口がついています。エナガの巣です。巣の下の部分が壊れており、カラスに巣を襲われたと推測しました。落ちていた巣を観察すると、様々なものがふくまれており大変驚きます。小さな鳥たちが懸命にあちこちから巣材を集めている姿を想像すると、子育てを応援

せずにはられません。



～巣材に

使われていたもの～

- 鳥の羽・・・オオルリ・メジロ・ヤマドリ
オナガなど多くの鳥の羽根
- 動物の毛・・・タヌキ・ノウサギ・イヌ
- 蘚苔類・落ち葉・クモの糸など



煙の色がポイント!

吉住窯のひとり言

僕、吉住窯がお伝えします! 連載 - 4

IV. 煙の色について

炭焼きは古来より伝わる伝統的な技術で、何度焼いても同じ品質の炭が作れないと言う奥の深い技術であると、炭焼きのおじさんたちは言っています。炭の材料の種類、伐採からの期間や保存状態による水分量、炭材の太さ、炭窯内の充填状態など等、ひとつとして同じ条件にできません。このような中での炭焼きは、炭窯の煙突から出る煙の色の変化で炭化の進み具合や焼き上がりを推測します。僕は煙の色のみならず煙突出口の温度も合わせて監視され、過去の実績記録を参考に炭焼きが進められています。

煙の色は、焚き口に火が入り窯の中の温度が上がるにしたがって、まず炭材の水分が水蒸気として出始めます。このときは煙突からは白い煙がもくもくと出て、煙突出口の温度は80℃近くになります。さらに燃料焚きを続けると、刺激臭の強い煙に変わり、木の成分である“ヘミセルローズやセルローズ”の熱分解が始まったと判断。セルローズに続いて分解温度が高いリグニンも分解し、炭化が進む段階になると煙突の温度も徐々に上昇し、煙の量は少なくなり、色は白色が淡くなります。熱分解の終了が近づくと青みがかかった白色からほぼ無色になり炭化完了を意味し、炭焼き終盤です。

この後は、精錬と言って、炭になっていないガス分を抜く操作が行われ、最後に僕は完全密閉状態にされ、しばらくの眠りに入ります。

活動ふりかえり

～会員の声より～

早春の動植物をたずねる (平成19年3月17日)

春を見つけながら動植物とのふれあいを楽しみました。産卵のため池へやってきたホクリクサンショウウオの観察、フィールドに落ちている糞に生き物からのメッセージを感じたりしました。まず咲くマンサク、ショウジョウバカマ、シュンランの花が春の訪れを告げていました。(山口)

カタクリとギフチョウのウォッチング

講師 石動孝一氏・長谷川覚氏(平成19年4月7日)

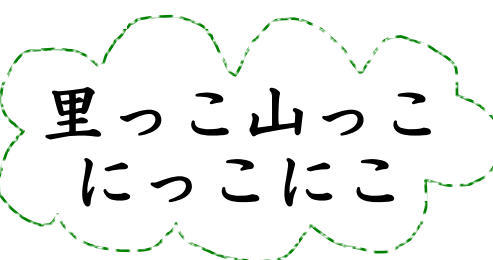
あたたかい陽ざしに包まれた春のお散歩本当に楽しかったです。かたかごやショウジョウバカマが咲き誇る野外へ飛び出すと、ギフチョウが優雅な姿で舞い、ビンゴをしながら散策。サンショウウオの卵のうを確認し、水辺でかわいいおたまと遊んだ楽しいふれあい教室でした。(中林)

たのしいクマ学—塾長講演— (平成19年4月22日)

一人で山里を歩くと、曲がり角では「熊にあわないかな」と不安があります。山に入るルールは「山の住人のクマさんに、鈴等で事前に挨拶しながら入る」事が大切との講義でした。ルールを守って楽しい山菜取りを行いたいと思います。(長谷川)



発見! ギフチョウの卵



年間を通じてねいの里で活動する人を紹介するコーナー

「富山県ジュニアナチュラリスト」

他県にさきがけナチュラリスト制度を作った富山県では、自然保護に対する意識の向上を図り、豊かな富山の自然を愛する子供たちを育成するため、平成12年度よりジュニアナチュラリスト養成講座を行っています。県内に住む小学校高学年から20歳未満人が対象者です。

自然観察会



萌芽調査



ビオトープづくり



認定を受けた後、自然観察活動に参加し理解を深め、時には生き物や自然環境に関する解説をおこなったり、調査の課題をもち、調査研究活動を行っている人もいます。

ねいの里では、自然観察や質問対応などを通しジュニアナチュラリスト活動のフォローアップを図っています。観察力が鋭く、好奇心の強いジュニアナチュラリストから大人たちが教えられる事も多く、にぎやかで楽しく活動しています。

受講生募集!!

平成19年度自然保護講座
ジュニアナチュラリスト養成コース

対象：中学生～20歳未満

お問合せは富山県自然保護課

076-444-3397

又はねいの里まで(5/21㊞切)

自然塾の会

(ねいの里のホームページで活動紹介しています。)

■ 活動予定 毎月第1土曜日が活動日

参加予約はいりません。お気軽にねいの里へお越しください！

(都合のよい時間だけの部分参加も歓迎です。)

昼食は各自ご持参ください、炭焼き小屋の囲炉裏をかこんでいただきます。

6月2日(土)

○ 午前10時～12時

「炭材運搬など炭焼き準備」

炭焼きのための木材運搬など、作業の協力をお願いします。ササユリやモリアオガエルの観察シーズンです。

7月7日(土)

○ 午前10時～12時

「ネイチャーゲームであそぼう」

五感でねいの里の自然を満喫しましょう！子供から大人まで楽しめるゲームを予定しています。

参加無料／要申込み

■ お 願 い

新年度の会員継続手続きをお願いしています。

Stop! ヒナの持ちかえり

小鳥たちの子育ての季節です。

鳥獣保護センターに持ち込まれる鳥で一番多いのは

ツバメなど小鳥のヒナです。巣から落下した場合は巣に戻しましょう。持参する前にお電話で相談下さい。

ねいの里行事案内

お電話でのお申込みが必要です。

詳細はHPで紹介しています。

5月13日(日)

8:00～12:00【野鳥の園・古洞池】

バードウォッチング

美しいさえずりのキビタキやオオルリなど、渡ってきた夏鳥を観察します。

野鳥の園駐車場にお集まりください。

6月16日(土)

19:00～21:00【ねいの里】

炭焼きとヘイケボタルの観察

新企画の行事です。水生庭苑では、毎年この時期ボタルが飛び交う様子が観察されています。塾の会では炭火焼料理(500円程度)を予定しています。

■ 愛鳥ポスター展 5月17日(木)～6月21日(木)

■ ビオトープと生き物写真展 6月24日(日)～8月31日(金)
作品募集中です！

■ ナチュラリストの自然解説で野外観察 たのしさ倍増！
土・日・祝日(11/3まで)、10:00・13:30・15:00～ 展示館前から出発します。

発行 生き物ふれあい自然塾 塾長 湯浅純孝

〒939-2632 富山県富山市婦中町吉住1-1 自然博物館ねいの里内

Tel 076-469-5252 / メールアドレス shizen@toyamap.or.jp

ホームページ <http://www.toyamap.or.jp/shizen/>

ふくろう通信

第5号

2007年5月5日

生き物ふれあい自然塾



見てみよう！

水生庭苑 花ごよみ

もともと園芸種のハナショウブやスイレンなどが植えられていた水生庭苑では、平成15年度から、県内の希少な動植物の保護管理に取り組み、生き物がにぎわう池となっています。5月から9月、水生庭苑は季節の移り変わりと共に色とりどりの水生植物がみられます。中でも5、6月は青々とした緑に、鮮やかな花の色が映えるアヤメ科の植物が魅力です。これらの植物は絵画やお皿の絵柄として用いられたり、詩歌に詠まれたり、また今では各地の花祭りでも話題になるなど、古くから日本人に親しまれてきました。

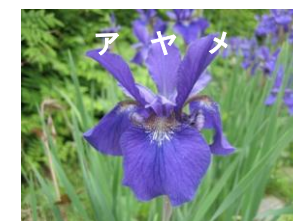
アヤメ科とひとまとめに言いますが、それぞれの生育する環境は異なります。



カキツバタ(県絶滅危惧種)

5月頃からねいの里で身ごろをむかえます。花びらの白い斑紋が特徴。湿地または浅い水辺を好みます。これまでロシア青少年交流事業やビオトープ整備行事などを通し植栽・株分けすることでしっかりと根づき増えてきました。

花びらに網目もよりの斑紋が特徴。陸地に生えます。5月中下旬開花。「菖蒲」で「あやめ」と読みますが「ショウブ」と同じ字を書くのでまぎらわしい。



アヤメ

かんちがいにご注意！

葉の香りが良く、端午の節句にショウブ湯とされる「ショウブ」はサトイモ科でアヤメ科の仲間ではありません。5月、金色の花穂が見られます。



ノハナショウブ(県絶滅危惧種)

6月、雨の季節に鮮やかな紫色が水生庭苑を明るくします。花びらの淡黄色の斑紋が特徴。日当たりがよく保水力のある畦などの斜面に生えます。「ショウブ祭り」で知られる「ハナショウブ」の原種。

これらの活動にボランティアとして中心に活動してくださっているのは、塾の会の津田さんご夫婦です。移植した土地に根づくよう、様々なお世話をして下さりこれらの植物を楽しむ事ができる水辺となりました。

一見似た姿の花たちですが、花期をずらし住みわけ、特有の花の色で私たちを楽しませてくれます。動植物を保護管理していく上で多様な環境の存在が様々な命を支えているということをお私たちに伝えています。